

★能力開発の哲学とテクノロジー

JADEC ニュース NO.94 2014/12/15

【 も く じ 】

- 地域を建設する人間形成のあり方を探る その4
石巻の小学生の“震災復興まちづくりプラン” …… 2
- 脳行動学講座28「まずやると決める」 …… 5
- 明瀬先生が願われたこと／自然に学ぶ姿勢 …… 6
- とびっく（メールマガジン始めました他） …… 8
- あんてな「君が僕の息子について教えてくれたこと」… 10

巻頭言 認知症とのつきあい方を変えた学習療法

～ 「楽しく学ぶこと」の意味 ～

能力開発工学センター研究開発部 白尾 彰浩

認知症の進行を遅らせる画期的な“学習療法”をご存じだろうか。脳トシで有名な東北大学川島隆太教授を中心に1998年頃から研究されてきたものだ。川島氏は、認知症は脳の前頭葉の働きが低下していることに注目した。前頭葉は、思考する、意志決定する、感情・行動を制御する、コミュニケーションするなど、人間を人間らしくしている中核部分だ。子どもたちの脳を健全に発達させることを研究していた川島氏は、音読や簡単な計算（足し算、引き算など）によって前頭前野が活発に働く様子から、これらが認知症の改善に役に立つのではないかと考えた。

日本各地の認知症ケア施設の協力を得ながら、読み書きと簡単な計算ドリルを用意して、1日20分から30分ずつ、数ヶ月以上にわたる学習実験を行った。結果は予想通り、いや予想以上の成果（変化）があった。認知症で寝たきりだった人が起き上がり、リハビリに意欲を見せるようになったり、おむつを着けていた人が尿意を伝え、おむつなしで生活できるようになったりと、個人差はあるものの様々な変化が起きた。

この変化をもたらしたものは何か。読み書きや計算ドリルが直接のきっかけになったことは確かだが、もう少し大きく捉えるならば、本人による「学習」という行為そのものが挙げられる。周囲の人々はその学習を支援し、本人を大いに誉めて励ました。その結果、本人自身と取り巻く人々の見方、考え方が変わった。

それまでは、食事も排泄も一人ではできない介護の対象者、と周囲も本人もそう思っていた。ところがこの「学習する」という新たな機会を与えられて、場が変わった。最初はその学習に対して懐疑的だったスタッフも、これだけ変わるならば、他のあの人にもこんなことをやってみたらどうだろうか、一人ひとりの可能性を考えるようになっていったという。

超高齢化社会となった日本において、認知症は取り組まざるをえない重要な課題だ。私が学習療法センターに問い合わせたときに、「“学習療法”は読み書き・計算を鍛えるトレーニングではありません。教材を通して学習者と支援者が楽しくコミュニケーションすることが何より大切」という担当者の言葉が印象に残っている。認知症が「恍惚の人」という小説で世間に知られたのが1972年。40年以上を経た今、“学習療法”は認知症に対する見方を飛躍的に転換させた。

そもそも、子どもの脳を発達させるところから始まった学習療法、一般の学校でも取り入れることを考えてみてはどうか。本人が苦手という意識を持たずに取り組める適切な教材があり、その学習で少しずつ自信をつける。そして周囲も成績にとらわれず本人の可能性を信じ協力するならば、間違いなく能力は向上する。学習の場を適切に構成することで、人間一人ひとりの可能性は確実に広がるのだ。

*学習療法の詳細は『学習療法の秘密』（くもん出版）、映画『僕がジョンと呼ばれるまで』に紹介されている。

発行者：(財)能力開発工学センター(Japan Ability Development Engineering Center)

石巻の小学生の“震災復興まちづくりプラン”

地域を建設する人間形成のあり方をテーマとしての第4回目、横浜国立大学准教授 金馬国晴(きんまくにはる)氏からの資料提供を受けて、まだ記憶に新しい東日本大震災の、その被災地での小学生の取り組み、石巻市雄勝(おがつ)小学校の児童たちの震災復興学習を紹介する。

雄勝まちの震災前の人口は4300人。そのうち約3000人が津波で家屋を失った。中でも産業の中心地であった雄勝地区は630世帯のうち590世帯が全壊流失。雄勝小学校の校舎は津波により全壊したため、市立河北中学校の空き教室を間借り、108名いた子どもたちは、震災後3カ月の時点では40名と半数以下になった。教師たちの中の2人は、家を失い肉親を失った被災者であった。

そのような中、震災のあったその年に行われた総合学習「雄勝硯の復興とまちづくりについて考えよう」(6年生40時間)学習の目標としたのは、「地域の復興を学び、地域復興に参加する実践」である。同小学校教諭徳水博志氏の論文・報告*を基に紹介する。



*「生存の東北史」大月書店 2013年

《学習の経過》

平成11年8月～	①地域の復興市に南中ソーランで出演 ②雄勝硯工房の見学 ③雄勝の仮設住宅訪問/雄勝石で作った表札のプレゼント交流会
平成11年10月～	④「雄勝地区震災復興まちづくり協議会」の復興案の講話 ⑤まちづくりプランの考案 ⑤-1子どもたちによる話し合い ⑤-2仮設住民へのアンケート(復興についての意見を聞く) ⑤-3住民の願いに根差したまちづくりプランの作成
平成12年2月	⑥生活・総合発表会(全校児童と保護者を対象にして) ⑦まちづくりプランの明示化(立体模型の制作 6年生)
平成12年3月	⑧「雄勝地区震災復興まちづくり協議会」での意見表明

⑤-1の段階での子どもたちの発想は、「ゲームセンターがほしい」「ショッピングセンターがほしい」といった遊びや消費への欲求に終始したと徳水氏は書いている。発想は、その人の経験を土台にして考えられる。子どもの生活範囲・経験は短く狭いため、生活の基盤をつくるまち(地域)というものが、どのように成立しているのかということへのイメージができていないためと考えられる。

⑤-2は、教師の提案で行った仮設住宅の住民へのアンケート調査。家族を亡くした人、津波の恐ろしさ

で帰りたくても帰れない人、そうした人々が願う地域の復興とはどういうものなのか、子どもたちは様々な意見を聞いた。「現実のリアルな事実に触れさせ実感をくぐらせ現実認識を獲得させる」という教師のねらいである。⑤-3 ⑤-2 により被災住民の声を受け止めた子どもたちは、まちづくりの条件となる財政的な問題も学びつつ、自分たちのプランを見直し、地域復興のまちづくりプランとして練り上げていった。

《子どもたちのまちづくりプラン—立体模型製作まで》

そして2月、6年生は、全校児童と保護者を対象にして、3カ月余りにわたって練り上げたまちづくりプランを発表した。子どもたちのまちづくりのテーマは、『雄勝に来たら一日いても退屈しない、雄勝の自然を感じとることができる町』となった。雄勝の美しい海と山の自然環境を守るために、スーパー堤防は作らず、水産業と伝統工芸（雄勝硯）を土台にした観光のまちづくりを構想したものになっていた。

県道を高台に移し、跡地は桜を植えたサイクリングロードに。海釣り公園や農業体験の畑、取れた魚や野菜を調理するキャンプ場、特産品を売る海の駅、地域を支えるエネルギー源としての太陽光発電も計画に盛り込んだ。

さらに、この構想を立体模型として製作。3月には、「雄勝地区震災復興まちづくり協議会」（以下：まちづくり協議会）で発表し、まちづくりの復興プランについての意見表明を行った。石巻市役所雄勝総合支所長は発表を聞いて「胸に熱いものが込み上げてきた」「光を見るようだった」と述べたという。「子どもたちの学びが大人たちを感動させ、励まし、希望を与えた」と徳水氏は書いている。

★YouTubeにアップされた発表の様子 <https://www.youtube.com/watch?v=OzoZw3YmQw8>

子どもたちの意見表明の半年後の2012年8月、雄勝総合支所が作成した復興計画案には、子どもたちが提案したまちづくりプランの一部が採用され、高さ9.7mのスーパー堤防の建設を推し進める県の方針をそのまま受け入れるのではなく、美しい景観を守りたいという子どもたちや住民の意見に沿って、ぎりぎりの妥協案が示されていたという。

《地域の現実にぶつかって課題をとらえる》

この、石巻雄勝小学校の取り組みには、地域の建設（あるいは再生）をする人間を育てるための、重要な視点がいくつも見いだせる。

まず、地域建設計画を立てることを経験させることによって、地域建設（復興）の視点を育てていくという、そういう取り組みであったということ。計画を立てるその過程で、どのような問題が出てくるか、調査し、考え、問題解決のための工夫をする、そうした経験を積み重ねていくことによって、地域建設の視点が育っていくということが伝わってくる。

つぎに、地域の現実にぶつかったということ。これが、子どもたちがまちづくりプランに真剣に取り組ませる原動力となった。被災者へのアンケート取りという形で、自分たちと近い地域の人々がどのように思い、何を願っているのかを感じ取り、そうした人々の希望に結びつくようなリアルな地域の復興計画を立てることが、自分たち自身の課題であるということを感じさせたのである。押しつけられた課題でなく、自らが感じ取ったことによって、そのことに向かう意欲が生み出されたのである。

とはいえ、子どもたちがそれまでに持っているものだけでは、地域の現実の課題に迫れない。また、現実の課題を克服するための視点や、具体的な手立てを認識していない。雄勝の子供たちがリアルなまちづくりプランを組み立てることができた背景には何があったのか。

《教師の指導・地域との連携》

すぐれたまちづくりプランをつくるには、「地域社会建設の視点」が必要である。単なる施設や道路の集合としてのまちではなく、そこで仕事をし、生活し、それを喜びとする人々が住む地域社会を建設する視点である。その視点が子どもたちのものとなるためには、それがどのような経験によって培われていくかをとらえられていなければならない。長い経験の中で培われるその視点を、短い学校生活のあいだに合理的につかませるための

教育的視点、つまり、どういう経験をどのように積ませるかの設計がなされなければならない。そこに指導者の力が必要になる。徳水氏は、教員の身分のまま「まちづくり協議会」の一員として地域復興にかかわってきた自身の経験と立場が生きたという。地域の動きをいち早く取り込み、授業実践を展開できたのである。

そして、その経験ができる場・機会の提供。これには漁師たち中心に構成された「まちづくり協議会」が協力した。子どもたちの意見を大人の意見と対等に扱った、「この『まちづくり協議会』の対応があったからこそ、「新しい『生存の仕組』（大門正克）を作り出す子ども像が生まれた」と徳水氏は書いている。

また、そうした活動、地域の人々の思いを受け止めた石巻市役所雄勝総合支所の果たした役割も大きい。子どもたちのまちづくりプランは、地域社会・産業をささえる人々と教育者、そして行政が、「地域社会建設の視点」「次世代を育てる視点」をもって協力しあった結果のたまものであったと言えるだろう。

《行動することによって、進む力が生まれる》

震災後3年が過ぎて、世の中の被災地への関心は薄れつつある。しかし、雄勝町はようやくがれき撤去が終了したところ。子どもたちの発表から3年近くになる今も、こわれた防潮堤も道路もそのまま、生活基盤となる住宅再建がままならない状態である。長い避難生活で、直後以上に苦しさを感じている人が多いという。そうした人々に未来への希望を持って生活してもらおうようにするのは、実現性のある復興計画を早く示し着手するというに尽きると思う。

支援をただ待っていたのでは一歩も進まない、地域の漁師たちは、漁師の会社「OHガッツ」を立ち上げた。雄勝小では、まちづくりプランをつくりあげた6年生を送り出した後、OHガッツでの漁業体験をした総合学習「雄勝のホタテ養殖の復興とまちの復興を調べよう」（5年生）を展開した。「故郷の雄勝を復興している地域の大人に出会うことによって自己形成のモデルを見出してほしい」「行動することによって進む力が生まれるということを経験してほしい」というのが教師たちの願いである。

《地域が求める学力とは》

徳水氏はこうした活動を通じて、被災地が求める学力と「指導要領の目指す学力」との間には大きなずれがあると感じたという。そして、「故郷を愛し、故郷を復興する社会参加の学力」を提案した。地域復興の問題は、被災地ばかりでなく、多くの地域に於ける共通の問題であろう。そうした各地で次世代を担う子どもたちにどのような力を育ててやるべきか。

それぞれの地域で抱える問題は異なる。問題を見出す力、調査する力、解決するための力、仲間を作る力、そして故郷を愛する心、それらをどう育てていくのか。国語・算数では～、理科・社会科では～と決められた内容と、3年で～迄、5年で～迄といった段階、始めに学科ありき、段階ありきの指導要領のあり方、学力の概念はあらためなければならないのではないのか。

「地域社会建設の視点」「次世代を育てる視点」は、ただ考えるだけでできるものではない。教育に携わるものの仕事は、こうした問題をいかに自分たちの問題として考えてもらうようにするか、その方法を研究し、実践することではなかろうか。

(研究開発部)

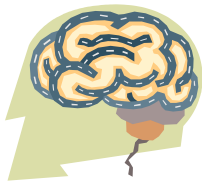
被災地での教育支援活動を続けている金馬国晴さん*は・・・

学校で今必要なことは、「科学文化を日常の地域・社会での生活で実際活用していくような社会参加の活動と学習」だと私は思う。近年目白押し社会問題は、若者の現在と将来の生活、そして日本社会を崩壊させかねない大問題ばかりだ。にもかかわらず、若者の関心は一部でしか高まっていない。20歳になってから「社会参加しよう」と呼びかけても遅い。小中学生のときから、自分事として考える機会を積み重ねることが必要だ。

そもそも震災・復興は他人事ではない。自分事として向き合う機会をつくること、それが学校の最低限の役割と言うべきかもしれない。



★横浜国立大学教育人間科学部准教授 矢口教育研究会メンバー



脳行動学講座 28

まず、やると決める

“小さな巨人” 緒方貞子さんの行動の法則

研究開発部 矢口みどり

■ ルールに従うのではなく、やるべきことをやる

1991年から2000年までの10年間、国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんの行動のしかたには一つの法則があった。やった方がよいと思われるが、そのことを実施するのは非常な困難を伴う、という課題が目の前に示されたとき、それを「やるべきかどうか」と考えるのではなく、まず「やる」と決めてしまうということだ。やると決めてから、そのやり方を考えるということである。

例えば、就任してすぐの1991年4月に発生した、イラクの一民族であるクルド人難民問題。武装蜂起したが、フセイン政権に追われ大半はトルコに逃れたが、40万人がイラク国内に取り残されてしまった。自国内にいる難民は、「迫害の恐れがあるために国外に逃れ、自国の保護を受けられない人々」という国連で決議した難民条約の定義には当てはまらないため見捨てる、というのが難民高等弁務官事務所（UNHCR）の慣例であった。しかし緒方さんは「支援を行う」と決めた。「国境を越えようと越えまいと、UNHCRは被害者とともにいるべきです」と幹部たちに伝えたという。

緒方さんは世界中からUNHCRの職員を北イラクに集め、多国籍軍の協力を得て難民キャンプを設置。国連もその活動を認め、30カ国からの支援物資、航空機200機、兵2万人の支援活動が展開された。

92年のボスニア・ヘルツェゴビナでの民族紛争では、国連軍を指揮下におきサラエボに食糧や水の補給をやったのけ、戦争終結後は対立民族が協働して行う事業等、様々な生活再建プロジェクトを立ち上げた。

■ やると決めると脳の働き方が違ってくる

緒方さんのこの行動の法則は、大学で国際政治学の非常勤講師をしていた子育て中の彼女が、婦人運動家の市川房江さんから日本代表として国連に3か月間行くことを頼まれたとき、迷う彼女に父の中村豊一さん（外交官：元フィンランド特命全権公使）が、「行くと決めて、あとのことは皆で考えればよい」とアドバイスしたことに始まるという。

まずやると決めると、やるべきかどうかを考えてから行動を起こすというのでは、脳の働き方が違ってくる。やると決める場合は、考える内容を「いかにやるか」に絞れるので、具体的な活動に展開するまでが早くなる。まず大きな目標、最終目標を決め、次に、具体的に行動するための条件を整えていく。

- ① 自分の条件を分析し、不足しているもの、障害となるものを洗い出す。
- ② 障害をどうしたら解消できるか、その手立てを考える。
- ③ その手立てを実現するための条件づくりをし、活動する。

手がかり足がかりを探し、つくる。仲間を探すことも重要な要素。そのことを相談できる人、アドバイスしてくれる人、手段を持っている人、教えてくれる人、直接手助けをしてくれる人、物資を提供してくれる人を探し、条件づくりをし、行動を展開していくのだ。

■ 「やるべき」と決める基準

緒方さんが「やる」と決めるその決断の基準は、「リスペクト（尊敬）」。「最も恵まれない人々を守ろうとする人への尊敬、そして当事者である恵まれない人々への尊敬。多くの人々が緒方さんの行動に共感し、心を動かされ、協力するのは、その基準があるからだろう。

我々の日常でも、その困難さゆえにやるべきかどうかを迷うことは、しばしば起こる。（緒方さんとは比べ物にならない些細なことではあるが）そんなとき、この緒方さんの行動の法則を思い起こしたい。

10月15日、能力開発工学センターの40年来の同志であった明瀬正則先生が亡くなりました。(享年88)

先生は富山市の小学校校長を歴任された後、富山市教育委員長を務められ、退任後1997年に、同志と探究クラブを開設、子どもたちの科学的探究力を育てるべく活動されていました。

いつも元気を下さった明瀬先生、所員一同、大変悲しい思いでいっぱいです。心よりご冥福をお祈りいたします。



明瀬先生が願われたこと

能力開発工学センター理事 小澤秀子

忘れられない明瀬先生の思い出があります。今から約40年前、当時JADECは、文部省(当時)の科研費による探究的学習の研究に取り組んでいました。学年や学習時間など現実にある制約をはずし、生徒たちが純粹に探究を進める条件とはどういうものか、教材、学習形態、教師の役割等について明らかにする研究です。テーマは「電気」。生徒が自ら探究するための学習プログラムを開発し、小中高の生徒たちに学習してもらい、その過程を分析するという実証的なビッグプロジェクトでした。

学習プログラムと教材の開発がほぼ終わり、富山県の全面協力で学習実験を始めようという段階で、県立科学教育センター所長の命を受け、明瀬先生が教材複製のためにJADECに来られました。

4000ステップに及びプログラムテキストと教材を丹念に調べた先生の言葉は衝撃的でした。「このプログラムで教えることはできない。ウソを教えることになる。」その決然とした態度に私たちは心底びっくりしました。何しろ矢口新やくちしん所長を中心に数人のスタッフが実験を重ねながら、精魂込めて作り上げた自信作でしたから。

先生は一步も引かないという態度でした。ウソというのは、例えば電気の流れを調べる過程で、実験に表れる現象からA電気、B電気という2種類の電気があるという仮説を立てるのですが、そのようなことについてだったと思います。憤然とした様子は今もありありと目に浮かびます。

しかしこの教材は、県センターを中心に、小中高の学校現場の協力で始まるプロジェクトに使われるもの、止めるわけにはいきません。先生は、ひたすら黙々と教材作りに励まれました。やがて教材は立派に出来上がりました。その間、先生はどんなお気持ちだったのか、何もおっしゃらないまま、「教えないでくれよ」という矢口所長の教えを持って富山に帰られました。

驚いたのは、その後富山に出かけた時です。学習実験が終わり、拡大実践に入っていた頃です。そこには生徒と一緒に探究する明瀬先生の姿がありました。生徒の傍らからそっと話しかけたり、手伝ったり、一緒に笑ったりする姿は、いかにも楽しそうでした。その姿から私は、生徒に探究させるための教師の行動のしかたをはっきりと悟りました。理屈ではわかっているつもりでしたが、「教えないとは、こういうことか」と実感としてしっかりつかんだのはこの時でした。この体験は私のその後の研究にも実践にも大きな力になりました。

明瀬先生を変えたのはいったい何だったのでしょうか。中学生3人を対象とした第一期の学習実験、明瀬先生はその総括班長としてインストラクターを務められました。学習には放課後の1時間を当て、県センター所員2人と共に100回以上も学校に出向き、学習活動のすべてを記録し検討するという体制で行われました。この実験の報告書に先生は以下のように書かれています。

「(最初の頃)生徒たちは全く積極性がない。何かというと教師の顔を見る。教えずに我慢するのは辛かった。教えないのに学校へ通うことのむなしさを感じた。同行した同僚みんなが味わった感じである。」「しかし40時間ぐらい続けると、生徒の態度がすっかり変わった。テキストとは違う推論をたてるようになった。立派な推論だ。それは、一つや二つの実験からは、決して出せない推論である。生徒たちの長い学習の累積と整理によって得られたものであり、その洞察力のすばらしさに私は心を打たれた。」

【8ページに続く】

自然に学ぶ姿勢

明瀬 正則

能力開発工学センター研究紀要30号（1975年）
「システム開発における教師の探究姿勢」より

「金属や木のように電気の動きやすい物質でも絶縁して摩擦すれば静電気が発生するかもしれない」という学習段階の実験をしていた時である。私は「多分、木と銅は摩擦をすれば、帯電列表にあるように、木は+になるだろう」と思いながら、木と銅をこすって箔検電器で調べてみた。

ところが、木が-になった。「おかしい」もう一度やってみた。やはり-になる。再度こすって調べた。すると今度は+になった。「これはおかしい。どうして+になったり-になったりするのだろうか。」私は何回も何回もこすって調べた。結果はやはりバラバラである。「どんな材料でやったら+にいつもなるのだろうか。」こんなことを考えているところに矢口先生が来られたので、「どうも結果がはっきりしません。どうしたらよいでしょう」と尋ねた。すると先生は事も無げに「それでいいんだよ。ほかの金属もやってみたら」とおっしゃっただけだった。

いま私は木が+にならないで困っているのに、先生は何とっておられるのだろうか。私は少し腹立たしさを感じながらも、アルミニウムと木をこすことにした。これもまた何回調べても+になったり-になったりして、どうもはっきりしない。困った。どうしたらよいか。

結果はわからないとするか、と思った瞬間、頭にひらめいたのが「それでいいんだよ」という先生の言葉だった。そうだったのか。私は言葉の意味を次のように解釈してみた。

「君たちはとかく何かの本に書いてある言葉（帯電列）を信じる。そしてそれにとらわれ+か-かを決定しようとする。もし結果が本の様にならないと、そのようになる材料を選定して生徒に与えようとする。それは間違っただけである。自然は正直である。今の

現象は+になるべくして+になり、-になるべくして-になったのである。それはその木の特性であると考えられることもできる。しかしまた、それはその時の木の状態や、その空間の状態に関係するのかもしれない。

このように考えてくると、今この問題が発生したということは、これから何を研究すべきかという方向を示唆してくれたことなので、実験が失敗したと考えるのは誤りである。むしろ+か-か決定できないという現象に遭遇できたことこそ、次の行動を生み出すための尊い成果だったのだ。」

私は何かしら、物と物をこすという単純な操作の中にも、自然の見方、行動のしかたを探り当てたようで大変うれしくなってきた。

そして、私がこのような考えに達することができたのは「もっとほかの金属についてもやってみたら」という助言に支えられて、何回も何回も実験したということであり、しかもその結果が何種類についても不安定な現象であったということである。そのために、不安定というか、自然の真の姿を、まじめに受け止めなければならない立場に私が立たされたからこそ、初めて自然から学ぼうとする姿勢が芽生えはじめたのではなかろうかと考える。

今たどって来た道をそのまま生徒がたどり得るかどうかはわからないが、このような立場に立たせようとする努力は教育上大切なことだと思う。

このように考えてくると、今日まで行ってきた、少しでもわかりやすく、少しでも誤差が少なく教科書に一致するようにと努力してきた私の理科指導と、根本的に相違するものを感じる。

自然の真の姿をゆがめ、ある特定の現象をさも自然の真の姿であるかのように偽った実験（例えば、いつも木が+になるように加工した実験）からは、自然を人間の支配下に置いて破壊しようとする心は育っても、真に自然を愛し、親しみ、尊敬する心は育たないのではなかろうか。

「人間は教えられて利口になるのではなく、自然に働きかけ、自然に否定されることによって利口になるのだ」と矢口先生はおっしゃる。既成の知識を効率よく生徒に伝えればよいと考えてきた過去を、強く反省した次第である。

富山県科学教育センター研究主事（当時）

あんで・な



“君が僕の息子について教えてくれたこと”

表題は NHK のドキュメントのタイトル。自閉症の青年東田直樹さん（22 歳）が 13 歳の時に書いたエッセイを翻訳したアイルランドの作家デビッド・ミッチェルさんの思いと、2 人の交流を描いたもの。その再放送を見た。再々放送なので、既に多くの方がご覧になり、直樹君の書も読まれたのではないかと思ったが、どうしてもこの紙面でお伝えしたい思いに駆られて書いた。

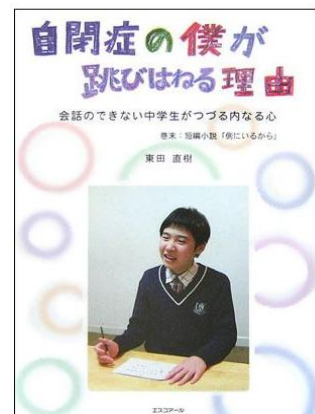
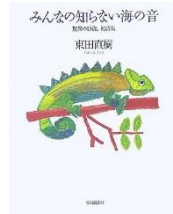
ミッチェルさんは、自閉症である 8 歳の息子の行動が理解できず、どうしたらよいのかと悩み、世界中の自閉症について書かれた本をさがした。英語教師として 7 年間日本に住んでいた経験があった彼は、自閉症の日本の 13 歳の少年が自分の行動と思いについて綴ったエッセイ「**自閉症の僕が飛び跳ねる理由**」に心惹かれた。取り寄せて読んでいた間中、ミッチェルさんは、息子が自分の気持ちを語りかけているように思ったという。そして、この本は自閉症をもつすべての親たちに役に立つものと考え、英訳し世界に紹介。それは、その後 20 か国語に翻訳されベストセラーになった。

直樹君は、お母さんの工夫によるワープロのキーの配置を書いた紙の上で、文字をたどりながら話すことができるようになり、今ではそれをさらに発展させて、パソコンで文章も書けるようになった。

「**自閉症の僕が飛び跳ねる理由**」は、質問に対して答えるという形で書かれている。自閉症の人はよく飛び跳ねるという傾向があるが、そのことについて 13 歳の直樹君は「それは体が悲しいことや嬉しいことに反応することです」と書いている。「何かが起こった瞬間、僕は雷に打たれたように硬直します。硬直は体が硬くなることではありません。自分の体が思う通り動かなくなることです。縛られた縄を振りほどくように、ピョンピョン跳びはねるのです。跳べば体が軽くなります。」

また、すぐに返事をしないことについては、時間がかかるのは相手の言っていることが分からないからではなく、「答えようとする時に、自分の言いたいことが頭の中から消えてしまう」からだとしている。「僕たちが一番つらいのは自分のせいで悲しんでいる人がいることです。自分がつらいことはがまんできます。しかし、自分がいることで周りを不幸にしていることは僕たちには耐えられないのです」「頑張りたいと思う気持ちはみんなと同じなのです。どうか僕たちが努力するのを手伝ってください」13 歳でここまで自分を見つめていることに驚かされるとともに、豊かな知性と社会性が感じ取れる。自閉症に対する認識が大きく変わる書であり、治療にも大きな改革が生まれる予感がする。ぜひお奨めしたい書である。

「皆が僕のために犠牲になっていると感じさせなかったことが、僕の家族のすごいところですよ」と自慢する家族のもとで、才能を伸ばしてきた東田さんは、著作活動を続け作家の道を歩んでいる。下に示したのは作品の一部。



(東田直樹さんの公式サイト <http://naoki-higashida.jp/>)

一般財団法人能力開発工学センター Japan Ability Development Engineering Center

〒352-0032 埼玉県新座市新堀 2-1-7-603

TEL:042-497-8024/FAX:042-497-8044

<http://www.jadec.or.jp/>

E-mail: info@jadec.or.jp